

おわりに

今年度特筆すべきは、三越厚生事業団医師の大幅な変動であろう。特に記録者の私は、神戸での学会参加中に転倒し、頸髄損傷を起こし、声を出すことは可能であったが、手足を動かすことが出来なかった。東京に戻り、頸椎の手術と専門病院での約6ヶ月のリハビリテーションにより、自力で歩くことは可能になった。ただ、上肢の動きは悪く、握力は正常人の4分の1もなく、手掌の痺れとともに今も支障として残っている。そのような理由で昨年度は通常の半分も勤務出来なかった。私以外にも循環器専門の加藤医師が久留米大学に異動となり、また、消化器専門の佐久間医師の退団があった。佐久間医師は呼吸器や循環器なども勉強しており、オールラウンドプレーヤーとして事業団のため働いてくれた。三人の医師の不在のなか、残った医師に大きな負荷がかかったが、奮闘して頂き、事業団運営を例年と同じように運ぶことが出来たことに感謝したい。

新しく行ったことを列举したい。

昨年度までの“ITセキュリティ委員会”を改め今年度は“情報システム委員会”とした。政府による「サイバーセキュリティ確保のための取組」の強化を医療機関に課したことを契機とし、当事業団でも見直しを行なった。より高いセキュリティ対策を行うため、健診システムと電子カルテを全面的に新しいシステムに変えることとした。

三越厚生事業団は社会貢献として毎年啓蒙活動を行っている。特に人気の高い健康セミナーは、日本橋三越本店の三越劇場で開催していた。これと並行して、三越医学研究助成と三越海外留学渡航費助成式もとり行なわれている。今年度は三越診療所、総合健診センターから歩いて5分もかからない京王プラザホテルで開催した。会場は満席であったが、参加者は昨年比若干少なかった。もう少し広い会場でも良かったかもしれない。

健康診断、診療の動向を見ると、健康診断では生活習慣病健診 入社時 定期健診、区民健診とも若干の減少。診療は外来患者数、予防注射数の減少があり、常勤診察医師の減少や新型コロナウイルスワクチンの自費化などが影響していた可能性がある。しかし、政府は高齢者が住み慣れた地域で安心して生活出来るよう地域包括ケアを策定し、かかりつけ医制度を推進している。当診療所の患者さんも高齢化が進んでおり、遠くから通ってきてくれる。都会のビルにある当診療所の立ち位置を明確にする必要がある。

今回も事業年報が電子媒体となった。電子媒体となったおかげで、職員が行った研修や勉強内容の一部を、YouTubeで確認できるようになり、年報の幅が広がった。

稿を終えるにあたり、年報の個々の項目について、原稿を書ってくれた職員、例年に比べ、多くの資料を提供してくれた船津医師、並びに山下所長、かつ、毎年年報の資料を作成してくれたスタッフの皆さん、年報の編集にあたってくれた事務局の方々すべてに感謝したい。

(水野 杏一 記)